三木先生のご退官によせて

本郷逕子

三木先生にお目にかかったのは、1991 年、私が専任になってからでした。今の日本語教育コースと呼ばれる大学院のプログラムは、当時は、日本言語文化専攻とよばれ、発足の時に親のように後ろ盾となった国文と大変密接な関係がございました。毎週水曜日に行なわれるコース会議も合同で行なわれ、国文の先生方とご一緒にお昼をいただきながらの会議でございました。国文には、立派な先生方が大勢いらっしゃいましたが、全く寡黙で、会議中一言もお話にならない先生も、何人かおいででした。三木先生も決して口数の多い先生ではいらっしゃいませんでしたが、意見を求められると、いつも、ご自身のご意見に加えての、大きな情報をお持ちと思われるような、しかし、それを表にひけらかすというのからは程遠い謙虚なご様子で、述べられていたのが、入ったばかりの右も左も分からぬ私にとっては、大変印象的でございました。

三木先生というと私は櫻の咲く頃を思い出します。先生の記憶力のすばらしさは、毎年の卒業式にお会いすると、ああ、まだ二分咲きですね、昭和〇〇年には、七、八分になっていて、早かったですね。昭和〇〇年にも、七分ぐらいになっていました。と、きっと何年もお書きになっていらっしゃる日記をご覧になって、話の種に情報を準備していらっしゃるのだろうと思っておりましたが、最近伺ったところによりますと、先生は、稀な記憶力の持ち主でいらっしゃって、記憶をたどられると、羨ましいことに、ついさっきのことのように沸々と過去の記憶が蘇ってくるのだそうです。

先だっての先生の送別会をかねた研究会懇親会では、先生の今までの学生が数多く出席し、先生とのお別れを惜しんでおりました。そのときの三木先生の笑みいっぱいの柔和なご表情から、いかに、先生が学生を愛され、学生と共に歩まれたかが覗えました。

三木先生、これからもお元気で、先生の素晴らしい記憶力をも生かして、益々ご活躍くださいますように。